

令和5年度 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
分担研究報告書

手話療育に必要な基本的な考え方と指導者養成に必要な教材等に関する研究

研究分担者 阿部敬信 九州産業大学 教授
研究協力者 池田亜希子 明晴学園 児童発達支援管理責任者

研究要旨 本分担研究では手話療育体制整備に係り手話療育を行う上で必要な基本的な考え方を整理し、それに基づいて手話療育の指導者養成に必要な教材等のあり方を明らかにすることを目的として、我が国で唯一日本手話による早期支援を行っている明晴プレスクールにおいて半構造化インタビュー調査などを行った。その結果、日本手話による早期支援には、「ろう児の思考スタイル」を踏まえた保育が必要であること、指導者がそれを理解し、実践レベルに適用できる能力を身に付ける必要性和そのための教材等を示した。

A. 研究目的

本研究は代表者研究では、早期から手話言語を習得できる体制整備を目指し、それに必要な事項を明らかにすることを目的として行われている。本分担研究では、そこに挙げられている目的の一つである「2. 手話療育、補聴の科学的知見及びこれらに係る技術的進歩の整理・情報提供ツール作成：知見を整理し、養育者と支援者（保育園、言語聴覚士、耳鼻咽喉科医、ろう学校教諭等）に、WEB サイトや動画を用いて、乳幼児の発達全体を踏まえた手話とコミュニケーション発達についての情報を提供する」ことにある。我が国においては、自然言語としての手話である日本手話を用いた超早期からの介入や支援は東京都品川区の明晴プレスクールめだかのみである。明晴プレスクールめだかは、2017年に学校法人明晴学園が児童発達支援事業所として設置した。日本手話と日本語のバイリンガルろう教育を実践している明晴学園（特別支援学校（聴覚障害））の乳児クラス（0・

1・2歳児対象）が積み上げてきた実践を引き継ぎ、さらなる充実と発展を目指して児童福祉施設としての事業化がなされた。そこで本分担研究では明晴プレスクールめだかでの0歳・1歳児に対する保育実践を観察するとともに、明晴プレスクールの統括ディレクターにインタビュー調査を行うこととした。

なお、本報告書では、日本手話を母語する聞こえない子どもをろう児とする。聞こえる子どもを聴児とし、聞こえる大人を聴者とする。

B. 研究方法

2024年2月に明晴プレスクールめだかの統括ディレクター玉田さとみ氏（聴者・ろう児の保護者）に対して半構造化インタビューを行った。半構造化インタビューにおける質問項目は本分担研究の目的から次のとおりとした。

(1) 明晴プレスクールめだかにおける日本手話による保育の基本的な考え方

(2) 日本手話と日本語のバイリンガルろう教育実践校である明晴学園との関係

(3) 日本手話による手話療育の体制整備にあたって生かすことのできる知見

また、同日、明晴プレスクールめだかの0歳・1歳児の設定保育「バスにのろう」を参観し、日本手話による保育実践の実際を観察した。設定保育の担当者は本研究の研究力者であり、日本手話のネイティブサイナーの池田亜希子氏（保育士資格・幼稚園教諭免許状）であった。

なお、本調査の実施にあたり、事前にインタビュー調査及び保育実践の参観と観察について、研究対象者に対して研究目的・研究方法・研究成果の公表について口頭にて説明し承諾を得た。学園の名称等については研究報告書で示すことについても了解を得た。

C. 研究結果

(1) について

ろう児の早期支援の基本的考え方としてあげられたのは、次の3点であった。

① ろう児の立場になって考えること

ろう児にとって情報とは見えるものであり、手話は「見える言語」であるが、音声言語はろう児にとっては「見えない言語」であり、「見える情報」を知り、考え、表し、利用することが最も適していることであると示された。

② 「ろう児の思考スタイル」に合ったアプローチ

ろう児は聞こえない聴者ではなく、「ろう児の思考スタイル」があるとされ、「目を合わせる」「確認する」「事前に言語化して伝える（見える化）」「ろう

児がイメージできる接し方」の原則が挙げられた。

③ ろう児にわかる手話

ろう児にわかる手話と言っても手話単語を並べるのではない。特に早期支援では日本手話の文法要素であるCL、NM、PTを用いることが、ろう児にとってわかりやすい手話となることが挙げられた。

(2) について

日本手話と日本語のバイリンガルろう教育を実践している明晴学園は幼稚部・小学部・中学部の学部があり、教育実践の中で大切にしていることは「しかあり」教育（図1）であること、明晴プレスクールめだかも、明晴学園の「しかあり」教育で乳幼児の保育から幼稚部、小学部、中学部の教育まで連続性を実現しているとのことであった。



図1 明晴学園の「しかあり」教育

特に直接接続となる明晴学園幼稚部の教育について遊びをとおして「しかあり」教育を実践し、幼児の概念形成を図る総合的な学びがどのように実践されているかの説明があった。これは明晴プレスクールめだかにおける乳児の遊びにおいても共通していることであると示された。

課題としては、明晴プレスクールめだかの2歳児が、必ずしも明晴学園幼稚園へ進学しないため 今後の連続性確保の観点から、明晴プレスクールめだかのあり方そのものの再編成を考えているとのことであった。

(3)について

ろう乳幼児の保護者はほとんどが聴者である。「ろう児にわかる手話」として日本手話の文法要素であるCL、NM、PTを用いることが必要とされても、すぐに日本手話ができるわけではないことはよく理解されており、ろう乳幼児の保護者へのアドバイスとして「まずは、ジェスチャーで!」「物や人の形、動き、様子をそのままあわらそう!」から始めるとしていた。すなわち「手話の単語は知らないけれど、ジェスチャーや指さし、写真、物を見せたり、触ったりしてたくさん会話をする」ことが大切とのことであった。これまでの知見から明晴学園では「聞こえない・聞こえにくい赤ちゃんの育て方」という冊子を作成したり(図2、3)、乳幼児のための日本手話のガイドとしてTipsを作成したりしている(図4)とのことであった。



図2 「聞こえない・聞こえにくい赤ちゃんの育て方」冊子の表紙及び裏表紙

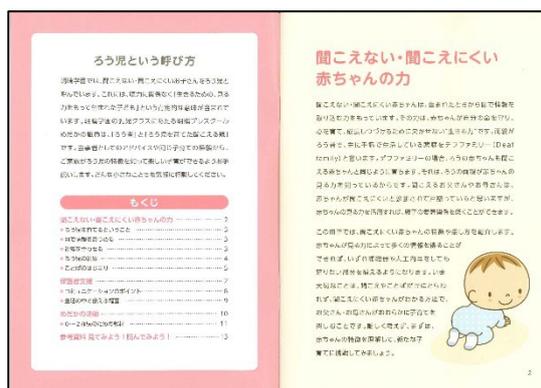


図3 「聞こえない・聞こえにくい赤ちゃんの育て方」冊子の目次と「はじめに」



図4 乳幼児のための日本手話 Tips

また、明晴プレスクールめだかの保育実践の動画を保存されているということであり、実践例として提供できる動画もいくつかあるとのことであった。

同日の設定保育「バスにのろう」では、0歳1名、1歳3名のろう児が出席していた。保育室には段ボール等で製作された都営バスを模したバスに運転席、乗客席が設置され、交通標識やバス停も、段ボール等で実物をそのまま再現してあった。そこで、ろう児はバスに出たり、入ったり、ハンドルを回したり、バスが動いている様子を乗客として再現したりして、保護者とともにバスに乗ることを楽しむとともに、保育者よりバスに乗る時のマナーの説明を受けたりしていた。この活動の前には、一つ一つの設定の説明が、段ボールバス等を実

際に見せながら行われており、ろう児の思考スタイルに沿った設定保育が実践されていた。

D. 考察

半構造化インタビューの調査結果から、手話療育の基本的な考え方も同じではないかと考えられた。本分担研究では日本手話を早期支援で用いることは前提としているが、その運用にあたって「ろう児の思考スタイル」を基本とすることによって、ろう児の概念形成や認知の発達に効果的であると推察できる。手話療育の指導者に必要な資質として、日本手話のネイティブサイナーであることを前提とするなら、「ろう児の思考スタイル」を理解し、それを実践レベルに適用できる能力が必要とされる。経験的には理解していることを、これまでの明晴プレスクールめだかで実践的に明らかにしてきた知見に則して整理することをおして、実践レベルに適用できるようにする必要がある。そのためにろう乳幼児の保護者に対する冊子や Tips は手話療育の指導者の育成にとって有効な資料となる。それを補助する教材として明晴プレスクールめだかの保育実践の動画も学びに効果的な教材となると考えられる。

また、手話療育の指導者に必要な基礎的な資格としては、保育士資格ということになる。保育士資格取得には、保育所での実習 10 日間、保育所以外での児童福祉施設での実習 10 日間が必修であり、さらに保育所もしくは保育所以外での児童福祉施設での実習が 10 日間選択必修として必要である。この実習のいずれかで明晴プレスクールめだかのような日本手話による早期支

援を行っている場での保育実習が必須ではないかと考えられる。現在、明晴プレスクールめだかは保育実習の対象となる児童発達支援事業所の枠組みでの運用がされていないということであり、組織の再編成を考えているとのことであった。これまでの日本手話による早期支援の実績もあること、我が国で唯一といってもいい場であることから特例による保育実習の認定も考慮する必要がある。

保育実践の参観と観察から、ろう乳幼児に適用できるアセスメントの開発が必要であると考えられた。日本手話の理解・表出・コミュニケーションという観点からの言語能力の評価、それともろう乳幼児に適した認知発達の評価が必要ではないか。的確な実態把握なしの療育は難しい。特に認知発達の評価については、「ろう児の思考スタイル」に則した方法を考慮する必要があると考えられる。

E. 結論

我が国で唯一ろう乳幼児に対する日本手話による早期支援を行っている明晴プレスクールにおける半構造化インタビュー調査及び設定保育の観察を実施した。その結果、手話療育において「ろう児の思考スタイル」を基本としたアプローチが必須であり、手話療育の指導者にはそれを実践レベルで適用できる能力が必要とされることが考えられた。手話療育の指導者を養成するための教材や実習のあり方、アセスメントの開発について考察した。

F. 研究発表

なし